

国際協力

JICA 駒ヶ根

特集

訓練所開設30周年
Part 1

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開設30周年

途上国の技術協力を担う青年海外協力隊。そんな彼、彼女らが世界へ飛び立つ前の訓練の場となる駒ヶ根青年海外協力隊訓練所が開設されてから、今年で30年を迎えました。この間、JICAボランティアの訓練のみならず、長野県の国際協力の最前線として尽力して参りました。30周年特集第一弾となる今回は、訓練所と連携した国際協力活動が盛んな駒ヶ根市を中心とした地域の取り組みを紹介し、訓練所の歩みを振り返ります。

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所 やまがた 山形 しげお 茂生 前所長



TOPICS

訓練所開設30周年特集	P1～3
地域のNGOとの連携	P4
お国自慢レシピ	P5
元気にやっとなるけ?	P5
長野県出身ボランティア 奮闘レポートリレー	P6
出発コメント	P7
訓練所の1日	P7
お知らせ	P8

訓練所開設当時の30年前は、目の前の中央自動車道がまだ全線開通以前で、長野市や東京との行き来が不便だったでしょう。最初は収容能力100人という今の半分弱の規模で、事前に1ヵ月間東京で座学中心の訓練を行ったのち、ここに移って自然豊かな環境の中で2ヵ月間の語学集中訓練を行いました。私も開設1年後に訓練生として仲間達と青春を過ごし、期待と若干の不安を抱いて任国へ旅立ったことが昨日のことに思い出されます。

その後増築を重ねて240名規模にまで拡充しましたが、量的側面だけでなく、一昨年からはシニア海外ボランティアも加わって、20歳から70歳までの年齢層が同じ目的に向かって2ヵ月間をともに過すという質の変化も伴い、日本のボランティア文化の発展も担っています。

開設当初から所外活動やクラブ活動で近隣の皆さんに陰に陽にご支援いただきました。その後、駒ヶ根協力隊を育てる会ができ、駒ヶ根青年会議所が中学生体験入隊を始め、駅前通りでみなこいワールドフェスタが始まり、市役所が職員をボランティア調整員としてネパールに派遣し、地元駒ヶ根と訓練所とがますます切っても切れない関係になっています。

訓練所と地域との関係は、長野県全体に広がりつつあります。訓練所の機能は訓練のみにとどまらず、13年前から長野県を担当するJICA国内機関として、草の根技術協力や青年研修で県内NGO、市民団体、自治体と、そして開発教育支援で小学校から大学までの教育機関などとの連携が進み、長野県内の国際協力・交流・理解の活動を支援しています。

途上国の幸せを願う人々と、そして地域を元気にするため活動する人々と、訓練所はこれからもともに歩んで行こうと思います。

駒ヶ根訓練所開設30周年に寄せて

駒ヶ根市 杉本 幸治 市長



駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開設30周年、誠におめでとうございます。「訓練所があるまち駒ヶ根」として心より喜び申し上げます。

訓練所を誘致して以来、当市は国際化のまちづくりを、訓練所のご支援・ご協力を得ながら進めてまいりました。

国際交流として、平成13年にネパールのポカラ市と国際交流友好都市協定の締結をしました。これを契機に、市民レベルでのポカラ市との交流や母子保健分野での国際協力が始まりました。また、途上国の青年研修員の受け入れや、当市職員をJICAネパール事務所へ研修のために派遣（これまでに4名）しています。

さらに、地域での交流として、中学生の体験入隊プログラム、訓練中のJICAボランティアの所外活動としての農家や福祉施設での体験実習や学校交流、国際交流・協力イベントである「みなこいワールドフェスタ」を開催しております。代表的なこれらの事業や取り組みは、この地に訓練所があったからこそ成し得たことであり、訓練所の存在は地域の国際化に大きな恩恵をもたらしていただいております。

この訓練所で訓練を受けたJICAボランティアは累積約15,000人と聞いております。この30周年を契機として、今後、国際化や多文化共生はもとより、当市をより魅力的なものとするために、訓練所との連携を強化しつつ、途上国で貴重な経験をされ、多様な知識と価値観を持ち合わせたJICAボランティアOVの皆様の英知を積極的に生かしながら、まちづくりを進めさせていただきたいと考えております。

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。



▲地元住民、JICAボランティアらが協力して盛り上げる「みなこいワールドフェスタ」。秋の駒ヶ根を国際的に染め上げます。



30th Ann

ネパールに飛ぶ駒ヶ根市職員

駒ヶ根市は平成10年から研修の一環として、職員をJICAネパール事務所のボランティア調整員として派遣しています。この夏の赴任を前に、駒ヶ根訓練所で語学を学んだ“5代目調整員”の白上陽子さんに、応募した動機と今後の抱負を語っていただきました。

JICAネパール事務所ボランティア調整員 白上 陽子 さん

全国に2ヶ所しかない青年海外協力隊訓練所は私が生まれ育った駒ヶ根市にあり、今年開設30年になります。この間、3万人以上のJICAボランティアの皆様が厳しい訓練を終えて、途上国の発展のために派遣され、あらためて訓練所の存在の大きさを感じております。

私にとっても協力隊はとても身近な存在で、幼い頃からいつか自分も国際貢献に携わりたいという夢があり、駒ヶ根市役所に就職後、「学校交流」を担当した際に、その想いは一層強いものとなりました。「学校交流」は訓練所がある街ならではの取り組みで、地域の小中高生がJICAボランティアとの交流により国際理解を図るものです。私はボランティアの皆さんの熱い志に触れ、現場の最前線で活躍されるボランティアの皆さんの活動を支援したいと調整員に応募いたしました。

駒ヶ根市はネパールのポカラ市と姉妹都市関係にあります。ネパールとの交流を一層推進し、相互理解の輪を広げることができるよう取り組みたいです。



▲語学クラスで英語を学ぶ白上さん。

ネパール勤務を終え、市役所に復帰した“先輩調整員”は、途上国の経験を日々の業務にどう活かしているのでしょうか。2代目の米山久之さん（秘書広報課係長）、3代目の林光洋さん（企画財政課主査）のお2人に話をうかがいました。

「訓練所がある街ということ強く意識して広報やイベントを行うようになった」と帰国後の心境の変化を語るのは米山さん。「グローバル化が進む時代、自治体の職員が国際感覚を持つのは非常に良いこと。どんなことも複眼的に見られるようになりました」と調整員の経験がもたらした効果を説明しています。

視野が広がったとするのは林さんも同様で、「世界の文化や環境を知り、違う視点からアイデアを出すことができるようになった」と強調。加えて「在日外国人の気持ちが少しわかるようになった」と、身近な国際問題に対する感覚がアップした点を話していました。

今回赴任する白上さんに対し、お二人は「一生懸命活動して、帰国後は違った風を市の運営に吹き込んでほしい」とエールを送っています。

駒ヶ根に戻った帰国隊員たち



▲駒ヶ根市のネパール訪問団に参加した野村さん（後方左）

二つのアルプスに囲まれ、中央を天竜川が貫く駒ヶ根市には、四季折々の顔を持つ豊かな自然と盛んな国際協力活動に魅せられて、協力隊活動終了後にIターンする方が相次いでいます。

「事あるごとにOB・OGに駒ヶ根の良さをアピールしています」と話すのは、今年市内にマイホームを建てた野村裕範さん（平成14年度3次隊・ネパール・都市計画）。鳥根県出身の野村さんがネパール・ポカラ市での隊員活動を終え、就職活動をしていたときのことです。JICAからの求人情報で「勤務地・駒ヶ根市」との文字が目にとまりました。職種は専門の建築。場所は派遣前訓練を受けた駒ヶ根、しかもポカラと姉妹都市の駒ヶ根。「何かの縁だ」と感じた野村さんは迷わず就職しました。

Iターン後、日々の仕事に汗を流す一方、駒ヶ根市のネパール訪問団に参加したり、国際協力に関する地元のイベントに積極的に参加したりと充実した日々を送っている野村さん。「隊員時代の経験を活かすことができる街だと思います」と笑顔で語ってくださいました。

「訓練中の駒ヶ根市の良いイメージが残っていた。緑が豊かで水がきれい。環境面で魅かれました」とIターン理由を話すのは川崎市出身の柚木正雄さん（平成12年度1次隊・ニカラグア・植林）。隊員活動中は植林に従事しましたが「木が育つには時間がかかる。その間に農業を指導できれば」と考え、帰国後は農業の道に。原村の八ヶ岳中央農業実践大学校に通うなどして知識と技術を蓄え、平成19年3月、駒ヶ根市に居を構えました。

まだまだ軌道に乗るまで時間がかかるとのことですが「訓練所のある駒ヶ根を農業を通じて活性化できたら」と話す柚木さん。「将来は海外で農業を通じた国際協力をしたい」と夢を膨らませています。

駒ヶ根訓練所から世界へと羽ばたいたJICAボランティア。任国でたくましく成長し、そして今、駒ヶ根の街づくりの一端を担い始めています。



▲ハウスの中で農作業をする柚木さん

iversary

教育現場に広がる国際協力の輪

駒ヶ根訓練所は様々な形で地域の教育機関と連携を図っています。その代表が派遣前訓練の講座でもある「学校交流」。小・中・高校生はもちろん、JICAボランティア自身の国際理解教育体験の場にしようと平成10年に始まりました。以来、駒ヶ根市の教育機関の特色の一つとして定着した学校交流。近年は周辺自治体にも交流の輪が広がっています。

訓練所が学区内にある駒ヶ根市赤穂南小学校は、3年生から6年生までの全クラスが年に一度はJICAボランティアと触れ合えるよう、学校交流のカリキュラムを組んでいます。平成16年にはJICAの「市民参加協力事業」を活用した「世界情報センター」が校内の一角に登場。交流に使用した資料や、任地に赴任したボランティアから届いた手紙などを展示して、世界と児童が常に触れ合える場を設けました。教頭の増澤進先生は「グローバル化が進む中、学校交流は大切にしたい活動の一つ。子どもも興味を持って取り組んでいます」と話されています。

赤穂高校（駒ヶ根市）は言語文化コースの生徒を中心に訓練所との交流を図っています。JICAボランティアが学校を訪問するだけでなく、生徒が訓練所で学習することもしばしば。教頭の村上重義先生は「駒ヶ根に居ながらにして世界の様子を学ぶことができます。本当にありがたいと思っています」と交流の意義を強調しています。

今年から交流の輪に加わったのは伊那市の長谷小学校。「交流することで子どもの世界への視野が広がれば」と導入理由を説明するのは小口稔子先生。「海外の知識はこれから益々必要になる。語学ではなく、テレビの知識でもないところで世界と接する機会を作ってあげたかった。いろいろな国を理解するきっかけになれば」と学校交流への期待を語っています。



▲赤穂南小学校に登場した「世界情報センター」。遠くの国々が身近に感じられるようになりました。

▼JICAボランティアと地元児童が触れ合う学校交流。お互いに新鮮な刺激を受けるようです。



海外からの青年とともに — 青年研修事業 —

青年研修は技術協力の一環として、途上国の未来づくりを担う青年層を対象に、日本の基礎的な技術や課題を理解するための研修を行う事業です。長野県内では保健医療や教育分野など、3つのコースを実施しています。

社団法人駒ヶ根青年会議所 こいで たかお
2008年度国際化担当副理事長 **小出 卓央 さん**

私たち社団法人駒ヶ根青年会議所は、駒ヶ根市、飯島町、宮田村、中川村の伊南四市町村を活動エリアとして、まちづくり事業を展開しています。私たちの住むこの伊南は、中央アルプスと南アルプスに囲まれ、中央を天竜川が流れる自然豊かで穏やかな山紫水明の地です。また1979年に開設された駒ヶ根青年海外協力隊訓練所は、港も空港もないこの地域と世界を結ぶ扉であり、地域における社会的財産として青少年育成活動や国際理解教育に大きな役割を果たしています。市民と協力隊とが手を結び毎年行っている中学生を対象とした「協力隊体験入隊」や、駒ヶ根市中心市街地で行っている「国際広場」は、この地域ならではの国際化まちづくりの姿といえるでしょう。



▲駒ヶ根市中沢小学校の児童と交流するインドネシア人青年

当会議所は1997年から青年研修（青年招へい）事業にも参加させて頂き、ネパールやインドネシア、バングラデシュなど様々な国の青年たちの受け入れを毎年行っています。青年研修においては、その年の研修目的にあわせ、日本（中央・地方）における保健医療システムや学校教育・企業経営などの理解や現状を知る中で、青年たちに自国での改善や啓発活動に役立てて頂く目的はもちろんのこと、青年会議所が行う事業ということで、民間外交推進の観点から地域の皆さんとの交流

という点にも重点を置いたプログラムをコーディネートしてきました。特に青年たちとのディスカッションや交流会、ホームステイ等では多くの地域の皆さんに参加・協力を頂き、この地に居ながら異文化を直接体験する機会を創出することで、顔の見える真の国際理解の場になったのではと考えます。青年たちが自国に帰った後でも、今なお実際の続いている市民の方も多くおられます。

私たちの住むこの伊南が、共生の心を持つ地球市民であふれるまち、多文化共生出来るまちへとますます歩んでいけるよう、これからも訓練所と共に歩むまちづくりを推進していきたいと思えます。



▲バングラデシュ青年との懇親会

“STOP 砂漠化” JICA草の根技術協力事業

JICAの市民参加事業である「草の根技術協力事業」はNGOや自治体、大学等がこれまでに培ってきた経験や技術を活かして企画した途上国への協力活動をJICAが支援し、3年間共同で実施する事業です。

NPO日中蒙農業交流協会 ただ ぎょういち
理事長 **竹田 恭一 さん**

最近、中国の食物の安全性や環境問題、農村の格差問題が注目されています。

当協会では、平成20年10月から砂漠化や土壌劣化が進行する中国内モンゴル自治区ドキトラ村において、JICAの草の根技術協力事業として「内モンゴル自治区ドキトラ村における作物残渣利用の有機肥料生産による農村の持続的生産環境づくり」プロジェクトを実施しています。

本プロジェクトでは、日本で長年培われてきた有機農法の農業技術を用いたヒマワリやトウモロコシなどの作物残渣の肥料化及びそれを利用した土壌改良を行ったうえで、日本式の野菜栽培技術の技術移転により付加価値の高い野菜を生産・販売して農家の収入増につなげることを目的としています。



▲堆肥の材料となる腐葉土やとうもろこしの茎やひまわりの茎を混ぜているところ

私は昨年11月にドキトラ村を訪れ、青年農民30名からなるカウンターパートと最初の堆肥作りを行ってきました。村から提供を受けた空き地を利用して10tほどの堆肥を作りました。現地は冬を迎え気温が氷点下になるため、堆肥の完成までには4~5ヶ月ほどかかりました。出来た堆肥は周りの農家に提供しました。

また、本年6月には信州大学農学部元教授の山寺先生の指導の下、堆肥を利用して育成した苗木を使い、砂漠化が進んでいる農村に対して砂漠緑化講習会を行いました。

私は現地を訪れるたびに、砂漠化が進む中国の辺境にある農村地帯でも日本の技術全般が高く評価されていることを実感し、日本の優れた農業技術の移転を通して、少しでも現地の農村のお役に立ちたいと願っています。



お国自慢レシピ

1991年に独立した中央アジアのキルギス。イスラム教徒が多数を占め、バラエティに富んだ羊料理などが楽しめる内陸国です。今回は訓練所のキルギス語講師としてボランティアに言葉や文化を伝えているラハット先生にキルギスの伝統料理を教えていただきました。

キルギス料理

ベシュバルマク БЕШ-БАРМАК

“ベシュバルマク”は、キルギスの伝統的で文化的なセレモニーのときにみんなで食べる料理です。決して一般的な料理ではありません。



この料理は、お箸・スプーン・フォークなどを使わず手で食べるもので、“ベシュ”は『5』、“バルマク”は『指』を意味します。けれど、今はもちろん、スプーン・フォークを使って食べる人が多いです。

この料理を作るために、普通、羊一頭を解体する必要があります。その後、その羊を12の部分に分け、“カザム”という鉄のお鍋に入れて、水と塩と一緒に、しっかり2時間くらい煮ます。最初は強火で、途中、灰汁を取り除いたら中火にします。鍋を火にかけている間は、最初から最後まで、ずっとふたをしています。

スープの味が調ってきたら、そろそろ出来上がりというサインです。この“ベシュバルマク”の肉を煮るのは男性の役目で、それもキルギスの伝統のひとつです。

スープが出来上がったら、手作りのうどんを出来上がったスープに入れて、10～15分くらい煮ます。大きいお皿に、切った細かい肉と新鮮な羊の脂肪も少し入れて、手作りのうどん、スープ1カップを注いで、しっかりと混ぜます。好みに合わせて、玉ねぎとこしょうを別のお鍋でこのスープで煮たものを、さらに加える人もいます。

食べる前には、伝統的なやり方でその場にいる全員がしっかり手を洗い、食後も少し熱いくらいの水で同じように手を洗います。

このセレモニーは、一番年上の男性と女性が行います。切り分けた羊の12の大切な部分を、お客様の年齢によってつぎ分けます。最後に、食べられなかった羊の肉は、そのセレモニーの引き出物として、お客様が持ち帰ります。これも、古くからのキルギスの伝統です。

ベシュバルマク

材料 (6人前)

- 羊の肉・・・2kg (牛肉でもできます。)
- 水・・・4～5リットル
- 塩・・・大さじ1.5
- 手作りのうどん・・・300～400g
- 玉ねぎ・・・1つ (好みに合わせて)
- こしょう・・・ (好みに合わせて)

しびの主は
誰おら？

ラハット・オロゾベコワさん

ビシケク人文大学東洋学部を卒業しました。日本には3年くらい住んでいます。現在は、JICAの駒ヶ根訓練所でキルギス語とロシア語を教えています。

日本について強く印象に残っているのは、京都に行ったときのことです。京都で感じた匂いこそ、私のイメージする日本の匂いだと思います。思わず、その場にいた友達に、「みんな、この空気を吸って！日本を感じない？」と言ってしまったくらいです。

今でも京都のことを考えると、その匂いと共にあの街並みが頭に浮かんできます。この感動は、一生心に持っておきます。



元気に やっとなるけ？

所外活動先より 隊員へのメッセージ

あかほひがしこどもこりゅう
赤穂東子供交流センター



▲JICAボランティア(右)と触れ合う子どもたち

赤穂東小学校グラウンド内にある「赤穂東子供交流センター」は小学生の児童を対象に、主に放課後の健全な遊び場、生活の場を提供しています。所外活動の2日間、ボランティアは子どもたちと「遊び」を通して心の交流をしています。

赤穂東子供交流センターに通う子どもたちは、JICAボランティアをお兄さん・お姉さんと慕い、これから赴く任国について、いろいろな話が聞けるのを毎回楽しみにしています。宿題をみってくれたり、一輪車やサッカーなどで一緒になって遊んでくれたり、楽器や民族衣装を披露してくれたり…。所外活動で来てくれるボランティアの方々元気いっぱい子どもたちに負けない位パワフルに活動してくれています。

知らない国についてボランティアから話を聞くことで、子どもたちは世界に興味を持ち、聞いた各国の話を家庭でも幾度となくしているようです。「家族の団らんやセンター内で子どもたちとボランティアの交流が話題になることが多いですね」と職員の間でも話をしています。

また、ボランティアと約束をして、任国からの手紙を心待ちにする子どもたちもいます。海を越え未知なる国の風をのせて、世界各地から届く絵葉書は、子どもたちにとっても我々職員にとっても魅力的なものです。

交流したボランティアから贈られる色紙はセンター内の入り口横に掲示してあります。写真やメッセージを読み返しては、任国で活動するボランティアにエールを送っています。

ボランティア 奮闘レポート

report_46

ケニア

理数科教師（駒ヶ根市）

あき た

秋田

青年海外協力隊

みら る い

ミラ流氷さん

ケニア共和国

面積：58.3万 km²（日本の約1.5倍）

人口：3,750万人（2007年：世銀）

首都：ナイロビ

住民：キクユ人、ルヒヤ人、カレンジン人、ルオ人等

言語：スワヒリ語、英語

宗教：伝統宗教、キリスト教、イスラム教

（外務省HP：各国・地域情勢より）



▲数学の時間、生徒の答えを採点する秋田さん。

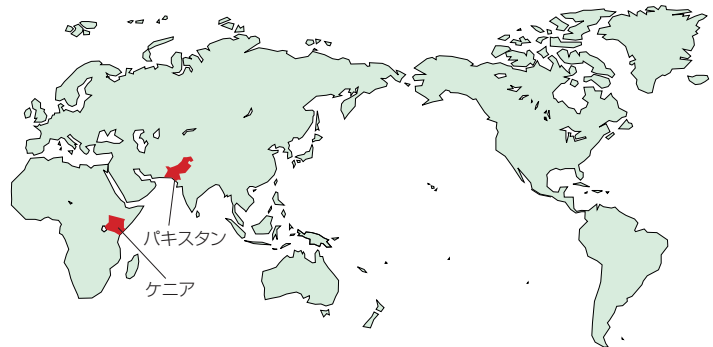
私の赴任先はナイロビから約2時間の所にあるマクワ中等学校です。生徒は日本の中学3年生から高校3年生までで、約1000人もいる大きな学校です。赴任当初は学校内に入ると大きな生徒達に囲まれてしまってドキドキでした。

普段学校では、ケニア人の先生と一緒に1年生の数学を教えたり、実験室で実験準備の手伝いをしたり、日本語を教えたりしています。イベントとしてJOCVを招いての大運動会をしたり、学校がお休みの時は同期の隊員が派遣されている更生院で理科教室をしたり

もしました。私は新卒参加なので、本当にケニアで勉強させてもらっているという感じです。

毎日の生活は、生徒や先生達にからかわれつつ、助けられつつ過ごしています。派遣国がアフリカに決まった時に一番心配だったのが食事でしたが、結構おいしく毎日の給食を食べています。メニューは2種類しかありませんが…。生徒達には「太った!! 何おいしいものを食べてるんだ!？」と、やっぱりからかわれる日々です。

服装にうるさかったり、会うたびに物をくれと言ってきたり、約束を簡単に破ったり…。ムカつくこともたくさんありますが、なんだかんだ憎めない人達に囲まれて毎日を過ごせていることに感謝です。



report_47

パキスタン

品質管理(金属部品加工)（茅野市）

シニア海外ボランティア

おお た まさ き

太田 優喜さん

パキスタン・イスラム共和国

面積：79.6万 km²（日本の約2倍）

人口：1億6,090万人（2007/2008年度暫定値）（年人口増加率2.6%）

首都：イスラマバード

住民：パンジャブ人、シンド人、バターン人、パローチ人

言語：ウルドゥー語（国語）

宗教：イスラム教（国教）

（外務省HP：各国・地域情勢より）

「ゴミ拾い奮闘記」

シニア海外ボランティアの太田です。出身地は涼しい信州ですが、暑いカラチにやってきました。元気に生活しています。まず一番驚いた事は雨の降らない事ですね。この一年間で4回ほどしか雨が降りませんでした。日本にいと水のありがたさを時として忘れてしまっていますが、カラチでは決して忘れることはありません。ここに1500万人が住んでいます。繊維と自動車が産業です。私は車部品の品質向上を支援しています。日本の皆さんは、パキスタンと聞くとすぐ危ないと連想するでしょうね。私は今まで身の危険を感じたことは一度もありません！またウルドゥー語なまりの英語に慣れなくて近くの公園に行きました。よく見ると芝生の上にゴミがたくさん捨てたままになっています。早速ゴミ拾いをはじめました。お前は今何をやっているのか？と言われました。ゴミ拾いは下層階級の人の仕事だからです。お前は日本人ではないのか？“そうです、朝は掃除人、昼は技術指導者、夜はちょっと寂しい男です”と答え、パキスタン人と一緒に笑いました。これから彼らに公園でゴミを捨てない事、ゴミを拾うことを語り続けていきます。これはこの国での教育・しつけの第一歩と考えています。



▲近くの公園で友達と記念撮影する太田さん。

行ってらっしゃい!! 長野県出身・新ボランティアのみなさん

長野県出身のボランティア計6名が6月下旬から順次、それぞれの任国へ出発しました。
(敬称略。かっこ内は派遣国名/職種/出身市町村)

【青年海外協力隊】



いじま ちづる さん
飯嶋 ちづる さん
(エクアドル/養護/伊那市)

南米にあるエクアドルの養護学校に派遣されます。日本とは違う環境の中であっても、個々の児童・生徒の課題を的確に把握し、課題にあった教材や指導法を任地の先生方と一緒に考えていきたいと思ひます。児童・生徒の成長の喜びをみんなで分かち合い、私自身も成長できる2年間にしたいです。



つちや みか さん
土屋 美夏 さん
(パナマ/村落開発普及員/東御市)

3年間勤めた東御市役所から現職での参加を認めていただき、この度、パナマのベラグアス県カニヤサスという農村に派遣されます。送り出していただいた職場の方々や友人等、周りの応援してくれた人達への感謝を忘れず、無事に2年間を過ごし成長して戻ってきます。



いいだ まなみ さん
飯田 愛実 さん
(ケニア/環境教育/駒ヶ根市)

ケニア東部の海洋公園へ、環境保護に関する理解促進活動やエコ・ツアーの企画運営のために派遣されます。現地の人々と協働で、サンゴ礁や海水魚などの豊富な海洋資源を守りながら活かし、持続的な地域振興に繋がる活動を行いたいと思ひます。



よしざわ みか さん
吉澤 実加 さん
(バングラデシュ/感染症対策/飯田市)

協力隊に憧れ3度目の挑戦でようやく夢の第一歩を踏み出します。現地では感染症対策という職種でフィラリア対策プログラムに参加します。1日1日を大切にいろいろなことを学びたいと思ひます。



しみず かおり さん
清水 香織 さん
(エルサルバドル/小学校教諭/駒ヶ根市)

中米エルサルバドルで教育環境の改善を目的として、小学校で活動を行ってきます。どこにいても、誰といても学ぶべきことはたくさんあると思ひます。現職で参加させていただけることに感謝し、エルサルバドルの方々と一緒に学び共に成長したいです。



さいのわき かずひで さん
幸脇 一英 さん
(ブラジル/移民史編纂/御代田町)

はじめまして!出版社勤務を終え、日本財団の支援で国連・平和大学の国際平和学(修士)を学び、比国ナガ市での街づくり、沖縄での農業自習を経て、ブラジルで重厚難題の「移民百年史」編纂を手伝います。艱難辛苦を乗り越えた多くの生き方を学び、2年後、御代田や国内外の村づくりに参加で出来ますことを楽しみにしています。お声を掛けて下さい。しなやかに頑張るつもりです。

【日系社会シニアボランティア】

次回の訓練予定

平成21年度第2次隊 派遣前訓練

平成21年7月8日(水)～9月10日(木)

「訓練所の一泊」 No.19 ～駒ヶ根訓練所のインターネット事情～

現在、訓練中のボランティアは居室がある宿泊棟でインターネットを利用することができます。宿泊棟等の数ヶ所に無線アクセスポイントが設置してあり、宿泊棟の各談話室(ボランティア同士が共同で利用できる部屋)でインターネットにアクセスすることができます。また、各階1台ずつ、合計6台のデスクトップPCを設置し、PCを訓練所に持参していないボランティアもPC利用することができます。訓練中でも派遣国の情報や職種の技術的な情報を収集できるようにと、平成17年3月に無線LANネットワークが設置されました。それまでは、図書資料室隣の一室をPCルームとし、有線LAN接続でのインターネット利用のみで、各自がノートPCを持ち寄って来る姿が見られました。近年、派遣中のボランティアがインターネットを介して報告書を提出した

り、様々な情報を得たりすることのできるJICAシステムが確立されました。訓練中のボランティアもそのシステムを利用することができます。訓練所にもIT化の波が訪れたようです。



▲宿泊棟でインターネットを使って情報収集するボランティア

JULY

7月

1日(水) 16:20-18:30

JICAボランティア事業説明会 (場所: 長野県看護大学)

8日(水)

平成21年度第2次隊派遣前訓練開始 (9/10までの65日間)

13日(月) 15:10-17:00

公開講座「国際関係と日本の国際協力」(講師: 廣野良吉氏/成蹊大学名誉教授)

14日(火) 13:00-14:50

公開講座「JICAボランティア事業の理念と目標」(講師: 伊藤隆文氏/JICA青年海外協力隊事務局長)

16日(木) 13:00-13:50

公開講座「JICA事業概要」(講師: 谷口誠氏/JICA青年海外協力隊事務局長)

25日(土) 12:00-15:00

長野県研修員、留学生との交歓会 (場所: 飯綱町霊仙寺湖畔、長野県青年海外協力隊OB会主催)

31日(金)

教師海外研修プログラム・ブラジル (8/13まで)

AUGUST

8月

1日(土) 15:10-17:00

公開講座「異文化の理解と適応」(講師: 木村秀雄氏/東京大学大学院教授)

2日(日) 15:15-17:40

平成21年度第2回長野県帰国ボランティアセミナー (場所: 駒ヶ根訓練所)

5日(水)

教師海外研修プログラム・フィリピン (8/13まで)

14日(金) 15:10-17:00

コンサート「地球のステージ」(桑山紀彦氏/地球のステージ事務局)

20日(木) 15:10-17:00

公開講座「ニッポンの知恵から学ぶ～日本の開発経験～」(講師: 水野正己氏/日本大学大学院教授)

27日(木) 15:10-17:00

公開講座「技術と開発のかたち」(講師: 中村尚司氏/龍谷大学教授)

SEPTEMBER

9月

10日(木)

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2009 締切(当日消印有効)

10日(木)

平成21年度第2次隊派遣前訓練修了

27日(日)

駒ヶ根高原マラソン (協力隊OB参加、及び懇親会)

29日(火)

青年研修/アフリカ(英語)/母子保健(上田市、10/16まで)

◆公開講座の聴講を希望される方は、2日前までに駒ヶ根青年海外協力隊訓練所・公開講座担当まで、ご連絡ください。なお、講師の都合で日程が変更となる場合もありますことを予めご了承ください。

編集後記

訓練所が駒ヶ根に開設されてから30年。特集の取材を通じ、訓練所が地域の方々を支えられていることをあらためて痛感しました。今後も、これまでの歴史を尊重しつつ、新たな成長を続けたいと思っています。その様子は随時紙面でお伝えしていきますので、どうぞご期待ください。(塩)

お知らせ (お問い合わせは駒ヶ根訓練所担当まで)

企画展「食」 この夏開催!

私たちが普段食べている食べ物を通じ、世界と信州とのかかわりを考えてみませんか? 駒ヶ根訓練所ではこの夏、暮らしに欠かせない「食」にスポットを当てます。見慣れた食べ物をちょっと違った角度から考えてみてください。意外な発見があるかもしれません。

期間: 7月7日～10月7日

場所: 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

主な企画: 夏休み親子料理教室、フェアトレード食品販売、地産地消即売会など

JICA中学生・高校生エッセイコンテスト2009 募集中

最近のニュース、学校で習ったこと、自分自身の体験などから、感じたことを自由に書いてみませんか。メールを打つように、友達に話すように、想像力の翼を大きく広げてください。
テーマ: 「行動」～地球と私のためにできること～
締め切り: 9月10日(当日消印有効)

がんばれ!! 長野県出身JICAボランティア!

JICAボランティア派遣実績

平成21年4月30日現在

①青年海外協力隊員数

派遣中 46名 (内女性30名)
帰国 588名 (内女性257名)
累計 634名 (内女性287名)

③日系社会青年ボランティア数

派遣中 2名 (内女性1名)
帰国 14名 (内女性8名)
累計 16名 (内女性9名)

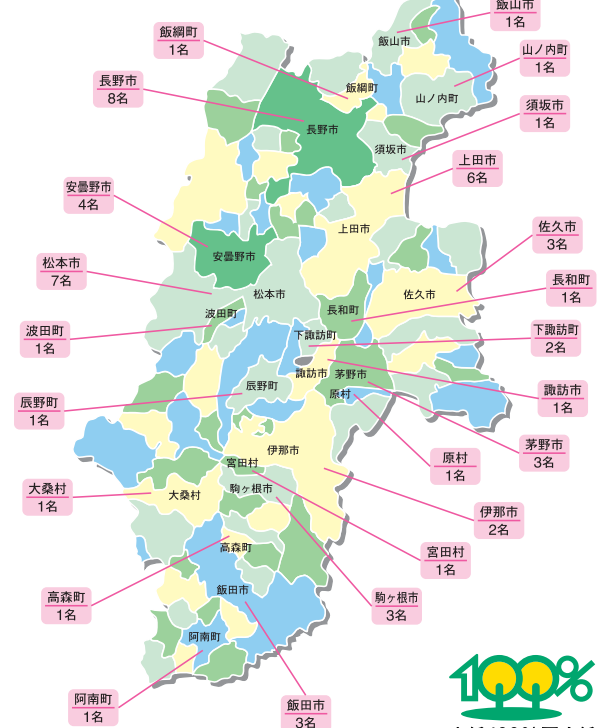
②シニア海外ボランティア数

派遣中 6名 (内女性2名)
帰国 23名 (内女性4名)
累計 29名 (内女性6名)

④日系社会シニアボランティア数

派遣中 0名 (内女性0名)
帰国 2名 (内女性0名)
累計 2名 (内女性0名)

派遣中JICAボランティア(平成21年4月30日現在)



100% 古紙100%再生紙

信州発 国際協力

独立行政法人 国際協力機構
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

〒399-4117

長野県駒ヶ根市赤穂15

TEL.0265-82-6151(代)/FAX.0265-82-5336

E-mail/jicakjv@jica.go.jp

http://www.jica.go.jp/komagane/index.html



駒ヶ根青年海外協力隊訓練所

